

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第10回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成22年5月21日(金) 午後3時30分～午後6時00分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	米津光治、赤木宏行、宮野いずみ、工藤智昭、難波民雄（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事、渡辺浩一 指導主事

1 挨拶

部長

この体力部会も2年目になる。いよいよ小中一貫教育の先生たちが具体的に授業を進める上で実践的な資料を作成し、小学校の児童の学習の特性や体力的な問題、中学校へのバトンタッチ、中学校の教員がそれをどのようにいかしていくかなど、さまざまな課題が浮き彫りにされてくるものと思う。

期間は9月ぐらいまで。短期間で具体的な資料をまとめなければいけない日程。ぜひ先生方の、日ごろの実践の中での知識やノウハウを十分いかし、より良い資料の作成を進めていただければありがたい。

アドバイザー

本年度は非常に限られた時間の中で具体的な指導案等、資料を作成する。今日は前回集まった委員のフリートーキングの中でいくつか話題になったことが資料としてまとまっている。こんなことが小中で課題になっているというのが明確になっている。

ワークシート等を含めて、それぞれ現場で既実践している事がたくさんある。例えば中学校から見た時に小学校の実践はどうか、あるいは中学校の実践を小学校から見た時にどうか。互いに改善すべきことがあると思う。これまでの実践をベースに、さらに精度が高まった、あるいはさらに創意工夫が加えられた資料になっていくのではないかと期待している。

2 協議

委員

資料の説明をお願いする。

事務局

前回の話し合いの中でさまざまなヒントがあったのではないかと考えている。

1の(1)。先生方のキーワードとして、Ⅱ期の充実が考えられる。そこに関連して、Ⅱ期を充実させるために、小1から小4までのⅠ期をどのように取り組んでⅡ期につなげていくかという視点も非常に大事ではないかと話し合った。

1の(2)。授業で即体力がつくかではなく、体育の授業等で学んだことの日常化を図っていくか、この視点が本研究の非常に大事なところではないかと確認できた。授業以外で子供たちが自ら運動に親しんでいこうとすることが体力につながっていくという考え方は、先生方に共

通していた。

1の(3)。体力の向上の「体力」という視点。運動によって体力を高めていくだけでいいのか、さまざまな運動に関する知識や食育等の生活習慣なども含めて体力向上に欠かせないというところを、特にアドバイザーのアドバイザー先生からもいろいろ指導をいただきたい。

また運動に関して、昨年度は「体づくり運動」に注目した。3番の提案事項にもある、「体づくり運動」をどこまで掘り下げていくかも、これから進めていくうえで確認したい。

1の(4)。アドバイザー先生にまとめていただいた言葉で、小中一貫のとても大切な点。小学校の先生方から見れば、小学校でさまざまな指導を続けて身に付いた力が、中学校でどのように育っていくのか。逆に言えば、それがうまく育っていくために小学校でどういうところをしっかりと教えなければいけないか。

中学校の視点としては、中学校1年生の入学の時点までに小学校での指導の経過を見ていく。そして小学校の先生がしっかり育ててきてくれたところをいかに中学校で伸ばしていくか。小学校、中学校の先生がそこで9年間の視点をどうもつかが、小中一貫の大切な視点。

繰り返しになるが、キーワードは「第Ⅱ期の充実」「運動の日常化」「運動のとらえ方」。前回の話し合いから、この辺りが研究を進めていくうえで非常に大切であり、押さえておきたい内容。1番で何かありましたらお願いしたい。

委員

今年度の取り組みの方向性ということで、キーワードを3つと体づくり運動が挙げた。これについて何か。

事務局

協議の(2)。作成する資料についてだが、こちらの資料の今年度のゴールと関連する。まず(1)だが、今年度は教材を作成する。冊子の形の成果物になるが、一つの部会に割り当てられているのは70ページ。体力向上で70ページ。内容は①と②があり、①は教員が授業を行うための学習指導案。これは一概に教科の指導案だけでなく、特別活動を行う際の指導案や、例えば体育集会を開くための指導事例も含まれる。

②は児童生徒が直接学習に活用するワークシートや資料。教員が使うものと子供が使うものを、集大成として70ページにまとめる。作成期限は今年度の10月29日提出となっていますので、その前に作成することになる。それに関連して(3)の今後の部会の予定だが、予算としては5月から9月までに8回開催できるだけ措置をしている。

10月には、9月までにできた70ページの教材の文言修正など、業者とのやりとりもある。9月末でまとめ、10月に修正・校正し、29日に間に合わせる。先ほど6月から9月までに部会を開ける回を提示したが、その中で調整して8回確保し、進めていけたらと考えている。

委員

では、役割分担及び次回までの課題について。

事務局

提案事項について説明する。大きく(1)と(2)があり、(1)は教員が授業を行うための

学習指導案に沿うものを挙げ、そして（２）は児童生徒が学習するためのワークシート等にかかわってくる。

まず、学習指導案の①について。前回のまとめでアドバイザー先生からご指導いただいた中に一つの例として、小学校の体育の授業に中学校の保健体育の教員が TT という形で参加し、特にⅡ期の接続の部分でより専門的な指導を充実させていけるのではないかとということがあった。

例えば、私が小中一貫を全く何も周知されていない保護者の一人として小中一貫のイメージをもった時に、先生方の教科の交流があるのかなと考える。そこで毎時間、中学校の教員が来るのではなく、この種目のこの時間に TT で入りワンポイント・アドバイスなど指導をする授業ができるといいと考えた。

中学校と小学校の体育の授業は拝見していて、始まりと終わりにおける集団行動が非常に違うと感じている。例えば体育の授業がスポーツの運動の種目が変わっていく第Ⅱ期、小学校5、6年生から中学校の教員が入っていくと、技能の向上もそうだが、授業規律として小中の接続もスムーズにいくのかなと考えている。

委員

ではこれについて意見をお願いしたい。

委員

実際、できたらいいが。

アドバイザー

TT ならいい。T2 でないから。

委員

T2 だったら支援員みたいだからいいということか？そういうのができれば小中一貫の売りにはなる。特に体育でできるのであれば、中学の先生は大変だが、実際にコマ数があればいいのではないかと思う。あと、どの領域をやるのかというのであれば、多分一番小学校の先生が一概にやりづらいのは器械運動ではないか。一番教えづらく、手が要り、個人差がある。器械運動は入ってもらったほうがいい。これは中学の先生でなくて小学校の先生だって2～3人いたほうがいいぐらい。

事務局

器械運動でも種目があるが、特にあるか？

委員

とび箱、マットだろう。

委員

とび箱、マットはやはり能力差が激しく、安全面のケアも必要。特に5、6年になると回転

系ハンドスプリングとか跳び箱の頭跳ね飛びなどにだんだん発展するので、その時に教員1人ではもう対応できない。

事務局

器械運動は子供によって取り組む種目が変わってくるということか。

委員

場が増えるので、安全面でも必要。あと高度な技術になっていくと教えられない先生も中にはいて、子供たちにここまでとなってしまふ。できる子には先をとるのであれば技術のある先生が来ると違う。中学の先生は時間的なものとか大丈夫か。

部長

器械運動という気がする。私も現役で体育の授業をした時に器械運動を考えてみると、小学校でどこまで教わってきたのかは気になるところ。そういう意味では、いま器械運動の名前が挙がってきたのは納得できる。ただ中学校の体育の教員も不得手にしている教員もいる。

例えば中学校1年生の4月、5月あたりの授業で最初に中学校の教員がやることは、いま事務局先生が指摘したようにまずは集団行動。体育の授業における授業規律の確立を一番メインにしているから。この体育の授業における授業規律が、言ってみればほかの教科における授業規律につながる部分がある。

これが非常に大きいので、体育の教員が最初に教えなければいけないのは授業に対する規律、要するにあいさつの仕方、集合の仕方。授業が始まる前に集まって整列してあいさつすることは、まず身に付けさせたい。

その後はすぐ陸上競技の種目に入る学校が非常に多い。陸上競技もやはり、小学校でどこまでやってきたのかをつかんでいる中学校の体育教員は極めて少ない。どういうスタートの仕方を教わってきたのか。中距離、長距離の場合はほとんど同じだが、短距離走ではどうなのか、障害走ではどうなのか、非常に気になるところ。

小中一貫教育ではないですが前任区の連携教育の中で、中学校の教員を年間3回ぐらい必修で小学校の授業に参加させて、研修会を開いた。そうすると小学校ではどこまでやってきたから中学校ではここからやろうという連携にもつながり、協議会等で非常に熱心に話が進んだ。

だから第Ⅱ期が、いま取り上げられた集団行動、授業規律から始まり、小学校の先生方が中学校の教員の手助けがほしいところは器械運動、非常にいいのではないかと思う。

委員

いま部長が言ったように、中学校の体育科教員で器械運動が苦手で指導できませんという教員も多分、現実にいる。もう一つは、時程のずれ。TTでやるといっても、中学校の教員が空いている時間と小学校の体育の時間とのずれもある。

小中一貫がどういう一貫になるかにもよるが、せつかく計画を作っても机上の空論になってしまうと困る。むしろ専科でどこまでかわれるかとか、つなぎの部分はどうするか。また、5年生はどうするのか、6年生は、7年生はという部分を考えていかなければならない。桜小中学の運動会で組体操をやることになり、今日も中学校で組体操を指導してきた。

委員

できるのか？T2か？それはいいのか？

委員

先行実施ということで全体指導をしている。

部長

中学校の運動会の組体操の全体指導を小学校教員がやっているのか。それはすごい。

委員

そうせざるを得なくなる時もあるかと。学年種目の組体操として出るのだが、小6と8年生が一緒にやっている。組体操の範囲はあくまでも小6が中心だが、中2の組体操も一部取り上げようと思っていて、中2の子のタワーは4段、ピラミッドも5段と、いろいろ考えている。

部長

現実に小中一貫教育への移行期間で苦慮されている学校の現場の先生の話を見ると、確かにそういう部分はある。例えば中学校の教員でも、先生が指摘し私も話したように、必ずしも器械運動が得意でない先生、年齢的な問題もある。現実問題としては、専科扱いで中学校の体育の教員が比較的得意としている種目をメインに進めていくことも、一つの手立てと感じる。

例えばこの資料を作るうえで一般的な考え方という視点に立ってみると、先ほど挙げた器械運動は、連携部分でなるほどと思える部分がある。陸上競技もそうですが、小学校の5、6年生から積み重ねてきた運動技能、スキルが中学校でも生きていく種目だと思う。

ほかの種目だと中学校で扱うサッカー、バスケットボール。今は小学校でもミニバスケットボールがあるので、そのまますんなりいくかもしれない。昨年も少し触れたが、中学校は授業を展開するうえでスポーツ種目という感覚が非常に強くなる。すると中学校がスタートした段階で一からスタートする教材が結構ある。

それと小学校からの積み重ねを中学校でも継続して教えていく種目もある。例えば鉄棒運動であれば、逆上がりから始まって懸垂支持とか、前回り、後回りなど小学校でやってきた技能を、さらに展開させる種目だと思う。跳び箱運動、マット運動でも確かに伺える。

一概にはいかないにしても、まずは一般的な考え方で進めていってもいいと思う。ただ先生の指摘のように、専科という考え方も一つの方向性かもしれない。

委員

実際は中学の体育の先生の得意分野でTTなり専科を行うほうが現実的ではあるが、ここに載せる資料としては一般的な方向で、器械運動、陸上競技などでやっていったらどうか。

事務局

免許と指導の関係を調べてきたものがある。免許の有無によって扱いが変わってくる。小学校の免許がなくても、当該教科については指導できる。

委員

委員先生は逆をやっている。小学校の立場で中学校との連携をはかっているのですから、実際にはもう前倒しでやっている。今の説明は逆で、中学校の先生が小学校の体育にかかわる。運動会をうまく連携させるために、小学校のスペシャリストの委員先生が体育の範疇で中2と連携している。

それは規則的にいいのか悪いのか分からないが、実際にやっているわけで、逆も、一般の体育の授業の中で中学の先生にかかわってもらうことも必要だということではないか。

委員

学級数との関係や中学の先生の空コマなどの関係もあるので、もしかすると人的な配置がないと無理かもしれない。体育は結構うまっている場合がある。一概にTTと言うが、空コマがなければ無理。現にうちの学校は出前授業を計画したが、空きのコマが全然合わない。例えば英語の先生に来ていただくとしても空コマがない。

委員

それは今後効果が上がり連結がうまくいくのであれば、事務的な操作で人的配置も検討してもらおうということで、理念としてはすごくいいと思う。中学の先生の専門性もあるが、小学校の先生で苦手な人よりも中学の体育の先生のほうが知っているわけで、その先生がかかわるのはいい。いま委員先生が体育で培ったことを中学校の連結の部分でやっているように、相互でやるのが小中一貫のいいところではないか。

委員

都レベルの人的配置は、区ではどうにもならない。区レベルでは学力向上支援講師とか生活支援員などが考えられるが、その人たちは単独では授業はできない。だから考えなければいけない。それがいま直面している問題。でも一般的にもありうる。

委員

小中一貫を考えた時にいい方法論だと思う。

事務局

資料としては、現実問題できるかどうか人的な配置はあるかと断り書きをつけて、こういう考え方があることを示すことはできる。まだ小中一貫に関しては、都の措置がまだ間に合っていないのが現状。

委員

本当は1人ぐらい人的配置があれば可能。

部長

統合校の人的配置のプラスαの部分はとてもありがたい。おそらく統合する学校の校長が意

図した人材がある程度集められる。特別な企画では授業の展開等も考えて人的配置を全面的に押し出していないと、せっかく区の教育課題の大きな目玉として推進していく時に、ブレーキがかかるような人的配置だとなかなか苦しい。

これはまた別の問題なのは分かるが、やはり人的配置は非常に大きい。スタート時にはある程度そこを考慮しないと、小学校、中学校双方の校長が苦慮する。

事務局

そういう意味では、部長の意見は本当にありがたいと思うが、この資料委員会ではできない話なので置いておいてもらいたい。

事務局

連携型の中高一貫にかかわったことがあるが、やはり TT は時間が合わなくて大変だった。幸い桜小中は学校間の距離が空いていないのですぐに交流できるが、今回、桜小中で示すことは、本区の全学校に例として示すことになる。ほかの学校でも活用できるところはしていただくのだが、通常の学校では隣接といってもいくらか距離が離れている中での教員の交流になっていくので、条件としてはもっと難しい。

私のかかわった実践でも年3回が限度だった。授業は最初から合わないの、中学校の教員が授業を入れ替えてなんとか、1時間目から3時間目を空くようにし、移動して帰ってくる時間も考慮してそこだけ特別に調整した。限られた時間なので種目は厳選し、どこに来て欲しいかよく話し合いながら進めていった。

部長

例えばいま現実的な課題を提示してもらったが、現在は移行期だから小学校は小学校、中学校は中学校でカリキュラムや週時程を組んでしまっていて、その中で TT を組むにしても、空き時間をうまく合わせるのが難しいのは、これは当然のこと。

ところが 24 年以降の小中一貫教育校の目玉には、例えばカリキュラムを一体化していくことも視点に入っているわけか？教員の週時程とかも全部一体化していくということか？

委員

もちろん。

部長

実際に 24 年度にスタートする時には、その辺りの課題はある程度、解決されていく。

事務局

当該校においては、5、6年生が中学校の校舎に移る案でいま進めている。

委員

桜小中の5、6年生は中学校の時程に合わせて 50 分授業、これはもう決定。もう一つは部活とクラブの関係で、これも今年にかぎり、6年生は6月から、5年生は10月から中学校の

部活に参加する。部活とクラブの関係、委員会の関係、そういうものがすべて絡んでくるので、その辺をどうしていくか。また、カリキュラムも1年生から9年生全部、完全に一本化する。どんな9年生になって欲しいかという部分から考え1年生まで下りていく、その辺を考えないと駄目。単純に年に2～3回行ってTTの授業をやればそれが一貫かという、そうではない。

部長

それでは連携の域に止まってしまう。

委員

遠足や体力づくりなどもそうだが、9年生にどうなってほしいかという像をめざした考え方をしないと一貫はできない。

TTをやるのであれば9年生を軸に置き、TTがどういう役割を果たすのか、体育科のTTの授業がどういう役割を果たすのかをきちっと検証していかないといけない。そうでないと、ただの連携でもできるじゃないかという話になってしまう。そう考えると壮大な計画になってしまうので、かなり厳しい。ただ指導案で示すのは、別に問題ない。

委員

TTでやる時はかなり打ち合わせが必要だが打合せをしたうえでやっているのか？

委員

やっている。

委員

先生が計画してやっているのか？組体操は？

委員

組体操は6年生の組体操に中学2年生が乗る形でやっているのですが、小学校の組体操の域は出ない。ただ部分的に中学校2年生でも扱えるような組体操を入れる形にしている。常に中学2年の先生と話をしている。

委員

ではここではTTという形で出すのか？専科も可能ということか？

事務局

現段階で専科までいってしまうと、具体性の面からなかなか難しいところが多い。他校にも活用してもらおう意味では、限られた回数の中でのTTを示したほうがより具体的。

委員

資料として、小学校の体育の授業に中学校の教員がTTで参加するという事例については、器械運動が一番だと思う。先の話で、陸上も専門性がすごく出てくる。体育をやっている人は

違います、ただ走らせているだけという先生も中にはいるので、そういう部分では系統的に出てくると結構おもしろい。

部長

勉強不足で申し訳ないが、ダンス、柔道、武道関係は、小学校ではどうなっているのか？

委員

武道はないが、表現運動はある。リズムダンス的なものは3、4年生でやる。

委員

あともう一つ、小学校の先生と中学校の先生の指導観が違う。

委員

それは大きい。

委員

これが大きな問題になっている。TT と言うが、小学校は運動好きな子供、運動を楽しくやる子供を育てていて、中学校へ行くとさらに上手になるために技能を追求する。究極の目的は多分同じで、運動を楽しくやることだが、小学校の場合は楽しく、運動好きな子を育てるのが大前提で、中学の場合ではそれプラスかなり専門的な技能が入ってくる。

例えば5、6年生の子に専門的な技能を教えていくのは果たしてどうなのか。その辺をうまくバランスとらないと体育はつまらないとなって、逆に嫌いになってしまう。

アドバイザー

体育に関して言うと多分今回の改定で初めて、小学校から高校までの12年間を3期に分けて考えている。いわゆるⅡ期、小学校5、6年生から中学1、2年生にかけては、運動から専門的なスポーツに変わっていく中で当然技能も変わっていくわけだが、それを発展的に押さえる。例えば小学校の高学年では、ボール運動であればこういうところをやりましょう。中学校に行けばサッカーとかバスケットなどスポーツに変わってくるから、その中ではこういう技能を獲得させよう、そういうことが学習指導要領では明確になっている。中学になれば専門的になるというのは、もう学習指導要領の中で明らかに押さえられている部分。

今まではどちらかというと小学校は小学校、中学校は中学校で完結していたからダブる部分もあり、同じことをもう一回最初から繰り返すこともあった。しかし今の学習指導要領ではそういうことはあり得ない。ただ逆に言うと、小学校のボール運動で5、6年生にどんな技能を獲得させているのかを中学校の先生が知らないと、本来は次の技能に発展していかない。

委員

技能の系統論もあり、運動の特性の系統論もあると思う。つまり特性の部分とか技能の部分、それから効果的なものもある。5～8年生は高校までをとらえた時の過渡期になるだろう。1年～4年、高校の9年生～12年生の過渡期の部分はやはり問題になる。

部長

5、6年生の専門的な技能の学習に関しては、子供たちの運動欲求はそこまで高まっていないのが現状ではないか。例えばサッカーの技能を高めるための授業展開をした時に、そこまでやってしまうとサッカーが嫌いになってしまう生徒が比較的多くいるような実態ではないか。

委員

学校にもよる。例えばサッカークラブがあったり、少年野球チームがあったりする学校もあり、そういう子供たちは技能論でもある程度いける。しかしあくまでもそういうところに属さないで体育で初めてサッカーをやる子供たちは、やはりちょっと「えっ」と思うかもしれない。

アドバイザー

基本的に小学校は共修。中学はどうなのか？

部長

基本的に別修で、種目によって共修。

委員

サッカーなどは別修。

委員

共修できる運動と、男女差が出てくるから共修できない運動がある。

アドバイザー

今までの経験則もあり、分けたほうがいいのではないかとやっている。確かに体格も違ってくるし性差も出てきてその辺の配慮も必要になってくるから当然のこと。少なくとも体育に関して言えば、共修で進められている小学校の授業とまだ別修が多い中学ではおのずと授業観、あるいは期待する技能のレベルが違ってくる。

事務局

小学校が終わり中学校の体育に替わっている現状から、そこを少し接続する、やや専門的なことも数回にわたって入り、また集団行動等の授業規律なども少し入ることで、今まで極端だった接続が少し緩やかになるというメリットがあるのではないか。

また小中の教員同士が情報交換する中で、いま何をしなければいけないかという指導観に変わってくる。これは連携をはかっていく時の大きな視点の変化だと実感する。

今回は一つの例示として出すので、小学校のTTのところでは器械運動を取り上げ、時期としては接続ということで5、6年辺りで、集団行動も含めながら指導案を作成してみるのも一つの手かなと思ひ、ここに挙げさせていただいた。1番はいかがか？

事務局

器械運動で5、6年ということで、いかがか？

委員

5、6、7としたほうが本当はいいと思う。5、6年は従来の小学校の枠なので、5、6、7の3年間でどういうTTの体制を作っていくかを示したほうがよりいい。

委員

7年生は違うのではないか？

委員

7年生だから本来中学の体育だが、そこに5年生、6年生、7年生にしないと駄目。

委員

II期で育てるのは一緒だが、TTとなると、7年生は基本的に中学の先生が主でやる。小学校の先生がTTに入るとのことじゃない。

委員

ただ7年生は…。おそらく、指導することはない。

委員

5、6は小学校の担当が基本的に先生で、つなぎの部分に中学の先生が入ることによってお互いスムーズに連携するからすごく分かる。7年生についてはバトンタッチして中学の先生がやっても、5、6年生の素地があるのでスムーズに中学の形態の授業に入っていける、そういう流れでいくのではないか。7年生はもう完全に中学の先生がやる。

委員

その中学という境目を作らないのが一貫かなというふうには思う。

委員

教科担任制になるのか？

委員

系統性としてその流れが見たい感じは確かにある。

事務局

今回TT一本の研究であればいろいろそういうところも考えていいかと思うのだが、これからまたいくつか提案するので、それも含めて意見を頂きたい。

それでは②。これは小中合同の縦割り班での体育集会の指導事例を一つ示したらどうかと、挙げた。その参考が今日配布したA3版。すべてが小中の縦割りではないが、いくつか全国の

体力向上の取り組み例があるので、その指導事例を一つ示していただければそれも活用できるのではないかと考えた。

例えば最後から2ページ目に事例31「小中一貫縦割りグループによる特別活動等の工夫と成果」がある。これは佐賀県の小中一貫校。

委員

小中合同の縦割りとは1年から6年まで、中1から中3年までということか？

アドバイザー

この小中合同の縦割りの体育集会は、それこそ合同の体育祭みたいなことも入るのかもしれないが、既に実践されているか、あるいはこれから実践しようとしているものを載せるのか？あるいは実践はしていないがこんなアイデアがある、そのレベルのものでいいのか？

事務局

どちらかというアイデアを示し、活用していただけたらと思う。

委員

どこかでやっているものを載せるのですか？それともこちらで考えるのか？

事務局

いま小学校ではよく体育集会等の取り組みがある。それに中学生も入っていけるような内容などを取り上げていただければいい。また中学生が入るのならちょっとこの辺りを工夫すれば活用できるのではないかと、一工夫入れて示していただけるといい。

委員

体育集会について、説明はそれか？体育集会、小中合同の縦割り班、小学校でやっているようなものに中学生が入っていけるものを何か一つ提示するということか？

事務局

そう。中学校はあまり体育集会はやらない。

部長

やらない。縦割り班とか縦割り学習という考え方はやはり小学校のほうが盛ん。例えば体育祭で色別に協力体制を組むことはあるが、通常の学習活動の中では、事例は少ない。

委員

集会自体があまりない。

部長

例えば小学校の縦割り班はおそらく上級生がある程度リーダーシップをとりながら展開して

いく場面が多い。すると第Ⅱ期において7年生、中学校1年生が小学校5、6年生をある程度リードしながらだとすると、中学校側の教員がこの縦割り学習という概念をかなり勉強していないと、中学生にその感覚を伝えていくのはなかなか難しい。そこが一つ大きなポイントでありネックにもなる。そういう概念はおそらく中学校側の教員には少ない。

委員

中学校の先生にかなりしっかり覚悟していただかないと縦割りは難しい。

委員

9年生まであって短い時間の中での縦割りは、結構厳しいのではないかな？

委員

中学校は定期考査とか修学旅行とかいろいろ動かせないものがあり、それに追われている。そこで縦割りの集会をやろうというと、全部一斉にその時間をとらなければならない、難しい。これは小さい学校だからできているのかもしれない。

委員

人数にもよる。

委員

やはり目的がぼけてしまう。集会は特別活動的な意味合いが強く、その中に体育的なものを入れるということで、本来体育集会は特別活動に近い活動。それでちょっと運動好きを増やそうというニュアンスなので、縦割りで中3から1年まではおそらく無理。ただもっと形態を変えて、近い学年で組んで交流を深めるとか…。

部長

縦割りとは第Ⅱ期の子供たちだけではなく中3から入るのか？

事務局

これは一例であって、例えば学年をどこかに絞るなどももちろん検討していく必要がある。ただこういった縦割りの集会を開くと、確実に育つのは中学生。中学生が小学生を育てていこうとする、これは非常に大きな成果だと考える。

部長

リーダーシップ。

事務局

中学1年生になると一番下になるのですが、その下にずらっといるので、先を見て動く子供になっていく。

部長

1年生から9年生まで9学年の縦割りをイメージしてしまうと大変かなと思うが、例えば第Ⅱ期の子供たちを対象に小学校5年生、6年生、中学校1年生。中学1年生はたったさっきまで小学校6年生だったわけだから、縦割り学習のリーダーシップをとっていた学年でもある。そういう意味で第Ⅱ期の短いスパンであれば、時間さえ確保して計画さえしっかりできていれば、決して無理ではない。

中学校の2年、3年、それから小学校の1年から4年までのⅠ期の子供たちもある程度視野に入れた縦割りは、さまざまな授業展開の中で授業を確保したり指導したりするのが現実問題、難しいと思う。対象とする子供たちの学年を短くして提示していく。

アドバイザー

同じ学校の中で顔が分かっているようであればいいのだが、物理的に離れている学校の中学生が小学校に行き縦割りで一緒に活動するのは無理がある。ただ中学校などでも保育園に行く体験をしている。それを体育的なものと絡めて、一貫校の低学年を使って実施するのは現実的だし、効果もある。

例えば9年生が1年生のところへ行くとか、8年生が2年生に行くとか、そういう形は十分あり得ると思うが、いま部長が心配している1年生から9年生までが縦割りで一斉に何かやるというのは、ちょっと難しいかもしれない。

委員

5年生と7年生のようにきょうだい学級で何かスポーツの交流をすれば可能。

桜小中で行くと、例えば遠足などで5年生と7年生、6年生と8年生でペアを作って行かせる。2学年ぐらいであれば比較的合うかなと。1年から9年までは、うちのシステムを見ても絶対にできない。運動会と一緒にやるが集会関係になると無理で、兄弟学年ぐらいならできる。

事務局

ここでⅡ期を中心とするならば、例えば5と7とか、6と8とか。

委員

もうちょっと下におろして4と7でもいい。

委員

うちでは、きょうだい学年で縦割り遊びというのを毎月やっている。

部長

きょうだい学年とはどういう意味か。

委員

1 - 4とか、2 - 5とか、3 - 6とか学校で決め、何をやるのもその組み合わせだから兄弟、弟と兄というイメージ。

アドバイザー

お世話するのとお世話される関係の中で。

事務局

ではきょうだい学年で簡単な運動事例でもいいが、そういったものを一つ指導事例として挙げてみるのはどうか？

委員

いま6年生と8年生が運動会に向けて組体操の取り組みをしているというようなこともきょうだい学年の事例として考えられる。

アドバイザー

小中合同で運動会をやっている学校はある。そういうところは、応援する学年などをきょうだい学年として決めておく。そういう取り組みは結構ある。

委員

これは集会に限定していくのかというところもあるが。

事務局

これは特別活動的というふうにとらえていいか？

アドバイザー

そのほうがいい。扱いは健康安全・体育的行事。

委員

運動を介した交流会ができるといい。

委員

あるいは何か日常的なものもあるかもしれない。

委員

縦割り遊びもできる。

委員

鬼ごっこや外遊びとか何か体を動かすようなことを計画すれば、それだけで体力向上に関わってくる。

委員

ではここは体育的行事としての縦割り、きょうだい学年の運動や遊びにとらえてよろしいか。

では3番をお願いしたい。

事務局

3番は知識面。これが保健体育になるか、特別活動の位置付けになるか、総合になるかはまた別にして、健康な体づくり等も含めた授業の指導のところであるとよいと考えた。

そこで学校の授業の取り組みだけで終わるのではなくできれば家庭と連携ということで、生活習慣チェックシートなどの実践を集めてその中で工夫ができれば思い挙げた。

委員

健康な体づくりを目指した授業（食育等を含む）、知識的な面、保健、食育等を含めたものを生活習慣シートなどとして作成し家庭と連携をはかるという案についてはいかがか。

委員

保健の授業になっていくと思う。

事務局

保健という位置付けでもいい。

事務局

事務局先生のイメージの中ではこの中間報告にある本部会の重視する指導項目のどれにあたりと考えるか？

事務局

三つ目の「健康を保持増進するための知識や理解」である。すでにいろいろな単元等が設定され、各教科で行われるようになってきている。だが学活や総合や特別活動のところで少し広い意味で取り上げることも可能ではないかと思う。運動のとらえ方、体力のとらえ方は運動ばかりではないということで、例えば栄養士さんとか養護教諭と連携をはかってやるなども入れておくといいと思い、ここに表した。

部長

今ほかの授業の中でもとあったが、例えば体育の授業の中でこれに触れるとすると、小学校の場合には保健の授業ですね。

アドバイザー

2年間で8時間ぐらい、高学年で16時間ぐらいだから、学年でいうと年間4時間か8時間程度で少ない。

事務局

イメージとして、例えば職場体験を10時間ぐらいやる前に勤労について学習するなど、メインになるものを補強するような形で道徳や特別活動を活用する。体育あるいは保健、家庭科

などでやる時期があれば、それに合わせて特別活動なり朝学活、終学活を使って運動の日常化を考え、健康に関する習慣化の意識を高めるための活動を提案するという考え方はどうか？

指導案で示したところで「すでにやっていますけど」と言われる可能性もある。だからそんな考え方はどうかと思う。子供に意識させ、重点化するための授業提案ということだ。

事務局

いくつかの学校で生活習慣チェックシートをやる期間を定めたりする。

例えば授業で知識を深めて、それを習慣とタイアップさせて各自の実践につなげていくとよりいいかと思ひ挙げた。

委員

これは何年生対象か？

事務局

これはⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期それぞれどの学年でもいいが、入れたほうがいいのではないかと。

これは提案するところが多くなるかもしれませんが、ほかの部会も同様。考えていることすべてに指導案をつけるのは無理だから、こういう理由で、何年生の特別活動にこの活動を入れてみる。実施にあたっては学習指導案と子供たちへのワークシートを示す。

委員

③が小中一貫である理由はどこにあるのか？学年を入れたらその学年の実践になってしまう。小中一貫たるものはどこで出てくるか。先ほどからそれをずっと考えていた。小中一貫の資料作成なのに、これをやったらその学年の指導案になってしまう。

部長

そう。その学年だけで終わってしまう。

事務局

ここで示すのは一つの学年になるかもしれないが、小中一貫として9年間を見通してこういう計画で生活習慣を正している、健康な体づくりを求めている、その一つの事例を示すという視点でここに載せた。9年間のスパンでの健康的な体づくりも視野に入れている。例えば生活習慣シートは小学校3年から中3まで継続して行っているものだという位置付けにもできると。ただやらせているだけでなく、ちゃんと授業や講義も踏まえて学校として深めていますという位置付けにできないか。

部長

昨年までの流れで知識理解を組み込んでいくことが確認されているので、これがわれわれの検討課題の中に入ってくるのは大前提だと思う。けれどもほかのところと比べると、いま指摘があったように、1年から9年生までの計画の中にこういうものがありますよと示す程度でもいいのかなという部分もある。

連携というものすごく大きなテーマを看板に背負わなくても、ある程度単発でそれぞれの学年でできてしまう部分もあるので、事例を簡単に示す程度でもいいのかなという感じはする。

事務局

先ほど委員先生が9年生をイメージしてと言ったが、9年生になるとこういう態度や意識などが身に付けられるように考えたい。それには学習指導領に示されているカリキュラムがあるけれども、プラスαあるいはそれがきちんとできる子供にするために見通したもの。カリキュラムとしてこれをやっていますよと示すだけでも済むかもしれないが、それをさらに強化する何かを示せるとありがたい。

委員

1年生から9年生までの大まかなものを作らなければ駄目。そして今回はその中のここを取り上げたというのであれば、一貫の意味はある。それだけを単発で載せただけではその学年の実践で終わってしまい、1年生から9年生までを縦の系列で、こういうふうに子供は成長していきますよ、今回はその中のこれを取り上げていますよという部分がないと駄目。1年から9年生までの見通しをはっきりさせないと駄目。

アドバイザー

前回マトリックス形式の資料を用意していただき、これは全部埋める必要ありますかと質問したが、これをそのまま全部示すかどうかは別にして、本来はここに入らなければいけない。だからこの学年でこれをやるのだと、根拠になるわけだから、それが必要。

事務局

心の教育の推進部会では、それを物語という言い方をしている。例えば9年間でこのような自尊感情を身に付けた子供たちに育てるために、今回お示するのは何学年の何で、それはこういう流れ、こういう物語があるからこことここを取り上げていると、いま委員先生が言った通りのことをやりたいとしている。

アドバイザー

本来はこれを全部埋める中で一つひとつ学習指導案を作っていくのが筋かもしれないが、それはすごく大変だから、逆にできた指導案をマトリックスの中にはめ込んでいく。

繰り返しになるが「健康を保持増進するための知識」は既に保健の中で、この学年ではこうと示されている部分もある。しかしそこは適時性の中で抜け落ちていたり、まだ十分でない学年もある。濃淡がある。その薄いところで、保健の教科にとらわれずに学級活動なり総合的な学習の時間などを使いながら対応していく事例としてはどんなものがあるかという考え方で聞いていた。

事務局

ではここはその一事例を示していくということで。

委員

保健中心になるか？

委員

保健に限らず。

事務局

学級活動でもいい。

アドバイザー

学級活動の中でこういう指導をすとか。見ると低学年はほとんどない。だから2年生ぐらいだったらどうするというようなことがあってもいいかもしれない。

事務局

5、6年生は移動教室に行く朝ごはんをセットではなくセルフでとる。だから家庭科で「今日の元気が出る朝ごはん」とか、「自分で考えてとっているかな」。そんなことを活用すとか、今やっていることとうまくリンクさせられればいい。

委員

食育で栄養士などが給食の時間にランチルームで話をしたり、噛み噛み何とかをやったりはしている。授業として取り上げていないので、そういうものに組み込んでいくことは可能。

事務局

いつそれをやると子供たちの意識が高まるかという考え方だと思う。

委員

例えば5年生の家庭科で「三つの栄養素」をやったとする。それをいかして働かせるためにはこういう指導を入れたほうがいいですよという部分を9年間ずっと積み上げていくことを考えないと、単純な栄養指導や食育教育で終わってしまう。そこを積み上げていき、最終的に健康な体づくりにつながっていくだろうと思う。ここはいろいろなのがあっていい。

事務局

今回すべてはできないのでその中の一つを提示し、そこから発展させていくということで。

それでは大きな2番、児童生徒が学習するためのワークシートや資料の括りになる。①の仮称の…。あくまでもこれはたたき台。前年度、子供たちの安全のところていろいろ話し合いがあったかと記憶している。特に小学校の破折事故は実際に非常に多い。本区でもぶつかって歯を打って折ってしまったというような情報が頻繁に入ってくる。

中学校の体育ではあいさつや準備運動が終わったら体力トレーニング的なものを少し補強として入れ、そこから主運動に入るといった流れが多い。

部長

体力づくりの感覚でそういう運動を入れ主運動に入っていくパターンをどの種目でも取り入れているのが現実。

事務局

そこの関連をはかる視点もあり、例えば体育の最初の導入時に適宜、安全な転び方を取り入れ、小学校の低・中・高の発達段階の中で段階的にいろいろな転び方の運動例等を積み重ねていく。一つの考えとしてそうしていったことを中学校で必修となる武道、柔道の受身などに関連させていくことができるのではないかな。

これをどこまでやるかは議論の余地があると思うが、主運動の前に何らかの運動を入れていくことで、中学校に行くという流れが大体できているので、そのまま接続できるのではない。それを定期的に行うことで自分の身を守るところも高まっていけば、これはこれで一つ大きな意味がある。昨年度の間接報告でも安全は表されています。特に小学校に関しては。

中学校の導入時の体力向上のトレーニングも、その学校で継続的に行われているものを継続して行っているケースや、体育の教員が個人的な経験の基にやってきたものを学校が変わっても行っているケースが、まますみ受けられる。ただ本区としては、瞬発力が弱い、敏捷性が弱い、投げる力が弱いといった課題もあるので、少しそういったところに視点を置いて、中学校段階ならば体力を高める種目例を示すこともできるのではない。

ここは二つ併記しているが、要は体育の授業における導入時の時間を使って一工夫できないか、そこを一つ提示できないか考えた。

例えば「ねりま安全体操」をDVDで作成し提示できないかと事務局で話した。要は体育の授業の導入時の充実のお話。いろいろご意見いただきたい。

部長

かつて大泉北中の校長が、小学校の段階から体育の授業の中で転び方を勉強させることでどれだけ中学生や高校生、大人になってから安全に対する意識が身につくか、熱弁していた。そういう意味ではこの話を聞くと当該の校長が喜ぶ。

本当に小学生だけではなく中学生も、なんでこういう怪我になるの。自分の体を支えるとか安全な身のこなし方だとか、巧緻性とも関係があると思うが、自分の体をうまく制御することのできない子が増えてきていると感じる。転び方だけではないと思うが、自分の体を安全にこなしていく体の動かし方を体力づくりという一貫の流れの中で主運動の前に組み入れていくことは、視点としてとてもいいのではないかな。

中学校段階でそれを組み入れても授業の展開では全く違和感なく、そのまま導入できる。ただどの中学校のどの体育の教員も体力づくり運動や補強運動を主運動の前にやってはいるが、やはりレベルの差がある。主運動をメインにした補強運動を組み立てている先生もいれば、自分の運動はこれだからどの種目でも必ずこれをやると、年間通してずっと一緒のこともある。それはもう体育教員一人ひとりの考え方、力量によって変わってくると思う。

委員

授業のはじめにラジオ体操をする先生はあまりいない。大体、主運動に合わせた補助運動を

入れ、それに合わせてコーディネーショントレーニングをやる先生が多い。

部長

体ほぐしという意味では「体ほぐし運動」というのがある。安全をかなり前面に出した運動で、その辺りの考え方も一つかと。

委員

「ねりま安全体操」、内容が難しい。

委員

「ねりま」という名前をつけて一貫校の資料にするのならば、かなりの運動分析が必要。アナログ的なものからずっと運動分析をしていく。例えば腕支持を高めるためにはこんな基本の運動がある。アナログとは要するに運動の元になる動き。例えば前転をさせるためにはこういう運動をさせておくとスムーズにできますよというように、体育では技能分析をしていくとそこにいく。そういう運動分析をしないと。単純に感覚的に作っても、何の説得力もない。

部長

その通り。基本的にはそこがないと意味がない。

主運動を助ける運動を補助運動として一つ示すとなると、いま先生が言ったように、主運動を補助する運動をしっかり技能分析していかなければいけない部分もある。

今ここに出ているのは、まず身の安全を考えさせ小学校の低学年から日常的に運動させることで、日常にもかかわりがあると思うが、自分の体を守る習慣にもつながってくる。それをまず前面に出していくことが必要。

それから体力づくりに関しては、確かに突き詰めて考えるとそうかもしれないがどの程度まで分析して提示していくのかはかなり難しい。

委員

運動分析だけで一つの研究になってしまい、大変なことになる。

委員

I期・II期・III期に合わせた内容を考えるには大変。身を守る動きを培うような動きは、毎回やっていけば高まるとは思うが、効能を考えた時にどういう動きか。しかも導入だから手軽でなければならない。

委員

それこそ柔道の受身ばかりをやるとか、そういう話になってしまう。

アドバイザー

I期の目指す子供像はいくつかありここでも何度も話題になったが、やはり安全に運動するための基本的な動きを獲得させること。ここには安全という言葉は出てこないが、安全にでき

なければ運動は楽しくない。文言としては出てこないが、I期で一番大事なのは運動の基本的な動きを身に付けること。まずI期の段階で丁寧に獲得させる学習資料があるといい。

合わせて②になるが、体力にはいろいろな要素があるが、特に練馬区で課題になっているこの体力のこの要素を高めるためには例えばこんな運動の例がありますよ、そういうものであれば十分示せる。

委員

②はできる。①が難しい。

事務局

①②を含めたような形で、②は体づくり。文科から出ているさまざまな動き例を参考にされているのではないか。これにいろいろな資料を少し膨らませたものを提示することで、体づくりの授業でも活用できるし、導入時のちょっとした体ほぐしとか、先ほどの転び方などもここに網羅して、さまざまな運動事例を示すことでさまざまなことに応用できるのではないか。①②を合わせた形で一つ提示できるといい。

事務局

4年生ぐらいまででこのイラスト入りは終わってしまう。私どもは教科書を扱う業者に資料作りを依頼しているので、「例えばこういう棒を引っ張っているイラストなどを作成していただけないでしょうか？」というご相談をした。5年、6年、中学校にも「体づくり運動」はあるが、文字が並んでいるのでイメージできない。

委員

これを作るということか？ 9年生まで？

事務局

4年生までであればこういった資料を参考にある程度できる。5年生以上のものがない。体力を高める運動となると、いま指導要領で示されているもの、あとは市販の資料だが、著作権があり、イラストをつけるとなると自分で描かなければならない。

委員

イラストレーターに頼めばいい。

事務局

今回の資料は多様な動きを作る運動ということで、先ほどアドバイザー先生も言ったように、さまざまな運動に安全に取り組みさせるためのさまざまな運動事例を提示する範囲で抑えるのも一つの方法かと思う。本来ならば9年生まで体力を高める運動事例があるとそれはそれでいいと思うが、膨大な時間とエネルギーを必要とする。

委員

それだけで一つの研究になる。

事務局

これに先ほどの転び方なども取り入れながら少し膨らませ、特に本区の課題となっている体力要素を高めることにつながるものを少し強調して入れていくと、いろいろ特色も出てくる。

委員

中学の畑先生が去年それを作り、やはり中学の資料がないと言っていた。中学は基本的に「体づくり運動」を主運動としないので、いろいろなアイデアがないと。

アドバイザー

実はそれがこれからの課題になる。今までは議論になっているように、主運動の前に5分とか10分帯でとって体づくりをやっているという実践で済んでいたが、今回の改訂では体づくりを単元として、7時間ぐらいまとめてやれという考え方がある。少なくとも練馬区としてはこう考えていますというものを outsake なければいけない。

委員

Ⅱ期からⅢ期の流れの中である程度7、8年生の例示をする。Ⅱ期でこうやってⅢ期でこうやれば、練馬区の課題である体力の不足しているところを向上させられる提案があって、そういうイラスト入りの運動例があれば、一番理想だ。本当に中学はなくて困ると言っていた。

委員

簡単なイメージを示してイラストレーターの方に頼みたい。

事務局

事務局で交渉する。

委員

中学の先生に小学校を見ながら意見をもらい、中学校でもこういう部分はできるかとか、中学レベルだからこれぐらいの負荷をかけるかなとか、運動の道具をちょっと変えようとか、そういうアイデアが出てくれば例示として出せる。

事務局

ここの活動を活用させてもらって、例えばもし5～9の「体づくり運動」に道具がいるとしたら、小中一貫の予算を取る時にちゃんととっておき、開校の時にはそういう道具がそろっていますよという考え方でできるとありがたい。

事務局

5、6年生もない。でも小学校はある程度はある？

委員

「体づくり運動」は資料がないから上の学年を整えていく。小学校はある程度はある。

アドバイザー

練馬区の体力の課題について四つあった。敏捷性・巧緻性、投力・ボール投げとシャトルランと立ち幅とび。9年間の中でこの課題を解決するという考え方でいけば、Ⅰ期では敏捷性を高めるためにこんな取り組みや運動例があり、Ⅱ期だったらこれ、投力だったらⅠ期ではこういう指導が必要で、Ⅱ期はこういうもの…という出し方のほうが単発よりいい。

特に高学年から中学にかけては当然、体育、保健体育の授業で学習させなければいけない中身があるので、これだけに特化して取り組むことはでないのもので、それは長いスパンで例を出していく。

委員

やるとしたら二つやるか、それともどちらかにするか。二つできればいいが。

事務局

第1回目で指導課長も申し上げたように、練馬区の課題があり、それを克服するためにということで考えていただきたい。体力向上検討委員会のほうでやる方法もある。

委員

それでいうと、練馬区の課題を9年間の中でⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期で押さえる。

委員

二つやっていくか、それとも課題に重点を置いてやっていくか。前回の話し合いでは、やはりⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期でのつながりが大事だという話がかかり出していた。

委員

その課題を回復するために、体力を高める内容の運動を例示するのはどうか。例えば投げるのも、体力を高めるための運動例を示せばいい。持久力を高めるのであれば、ただ単に持久走を走らせるのではなく持久力を高めるためのいろいろな方策がいま出ている。楽しみながら取り組んで体力や持久力もつくものを例示として出す。

委員

課題の部分に絞って。

委員

それを高めていくような運動を考えていけばいいと思う。

委員

練馬区の課題については、9年間の中でⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期で押さえていくということで。

事務局

この体力を高める運動の事例を9年間、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期でそれぞれ示していく。

委員

課題が四つあってⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の運動例を1個あてはめていけば、12個の事例が出る。

事務局

下の学年はこういったものを取り入れていく。いろいろ試行錯誤するのは上の学年で、一つのスパンを作ってみる。

委員

それが提案になるのではないか。

事務局

中学校のものはあまり書籍等も見ない。

アドバイザー

例えば陸上運動の中の立ち幅とびが練馬区の課題になっているから、中学校で陸上をやる時には主運動に入る前の段階でそれを意識したこんな運動の取り組みがいいのではないか、そういうような示し方でもいい。逆に「体づくり運動」で縛る必要はない。いずれにしても課題解決のためにどうするか。

事務局

例えば体育の教師が行っている主運動の前のいろいろな運動の運動例や運動パターンがたくさん示された資料があると、そこから抜き出して使ってみるという考えもある。

部長

それは当然、考えられる。

例えば小学校の事例で、プラスチックでできた槍のような教材を遠くに投げるものがある。ところが中学校は、投てきは砲丸も含めてやらない。そうすると教材の開発もなければ、教材を使って授業を工夫するアイデアも中学校にはない。けれども陸上で扱うかどうかは別にして、小学校でやっているものが中学校にも入ってくれば、まさに教材の整理などにつながっていく。それが投能力の改善につながればそれで十分。

委員

事例だから絵があって、簡単な運動の説明と、こんな力を高めるぐらいですね。

事務局

指導演形式ではなく、補助運動の例示集のような形。

委員

では②はそれでいいですね。③をお願いします。

事務局

本区では小3から中3まで、新体力テストを実施している。子供たちには個表が示され、自己分析できる形になっている。今日の資料にもあるが、自分でどういう運動をやっていこうか記入させたりする取り組みもある。事例6、鹿児島の小学校の「健康づくりカード」。

ここは本区において業者からのフィードバックが十分足りるのであれば、あえて踏み込む必要はないかと。③は取り入れるか、なしでもいいか。

委員

これは子供というよりも校内の先生がデータベースとして蓄積しておき、1年生から積み重ねて体力がどう変容したか使うべきものなのかなど。もちろん子供も一人ひとり読めると思うが、小中一貫で何ができるとなるとどうか。指導面では、データベースとして9年間学校におけるからこそ、すごく役に立つ。委員君は小学校のころこうだったから中1ではこんな子だったのかなどと見られるのは、小中一貫ではすごくいいこと。

けれども子供がそれをどう生かしていくのかということ、個表を見てその瞬間はいきませんが、だからどうするのと言われても難しい。蓄積して一括、9年間の体力管理がすごくよく分かるメリットは、ほかの学校よりも小中一貫であるのでそういうメリットはすごく感じる。

アドバイザー

もちろん体力テスト自体は小中一緒にやるのか、別々にやるのか？

委員

まだこれから。今年は別々。来年は一緒にやらざるを得ない。まだ話し合いが進んでない。

委員

体力テストの個表が返ってくると、私も子供に意識させて、自分はこうだからこういうことに取り組みたいとやりたいと思い、少しやったこともあるが難しい。このように活用の実践例があるのはすごくいい。

部長

子供に意識させた跡の継続的、持続的な学習がなかなか難しい。

委員

子供自身が自分のデータを見てどう運動を作っていこうかというのは、小学校段階では難しい。高校生でもスポーツの課題を作るのは、アスリートレベル。だからこそ教師がある程度意

識し、指導や普段の生活の中でこう取り組もうとやっていくしかない。

委員

②の運動例の中に新体力テストの活用から考えていく部分を取り入れたほうがいいのか。子供が自主的に考えるのはかなり難しい。

部長

練馬区の課題が個々ではこういうレベルですよというところ。この辺りも自分で活用していくのはなかなか難しい。練馬区の課題をうまく克服すれば、全体として一人ひとりの子供が新体力テストの結果をうまくこなしていることにもつながる。新体力テストを小中一貫教育で活用したものは、予算を取ってもらっている関係でありがたいのが。

事務局

傾向を知りたいのであれば練馬区の体力調査は抽出で済む。なぜ全児童生徒を対象にしているかという、個々人の体力の実態を個々人に認識させ、個々人でその改善をはかっていただきたい。必ずねらいの1番にはそのことをうたいすべて議会等には答弁している。ただ実態としてはやはり、小学校の低学年や3、4年生ですぐに改善の手立てを立てるのは難しい。

委員

むしろそれは教員側の問題。

委員

「体づくり運動」などでいくつかコーナーを設けた時に、自分はここが苦手だからこの運動を選択しようとか、あと時間数などでは使えるかと思う。

委員

自分は8種目あったテストの時に出了たデータで、遊び表を作った。敏捷性のない子が鬼ごっこをやると二重丸とか、竹馬遊びでバランスとか、サッカーはこれにいいよとか、全部で30種類ぐらいの校庭でできる遊び。それで休み時間に遊びに取り組んでみなさいとやった。

アドバイザー

選択させるためには個表が返ってきた時に子供に体力要素の意味などを説明する。体力テストが返ってきた最初に、子供にはその時間がなければいけない。端的に言うと最終的に自分の体力を知って自分の体力を高めるためにどんな計画を立てて運動に取り組むかは、中間報告書によればⅢ期。それはもう明確だから、Ⅲ期からやればいい。Ⅱ期から始めてもいいが。

だからⅠ期・Ⅱ期にやることは、子供が自分の体力を知り、選択し、計画して取り組むことではない。先生が実際にされたように、体力の要素それぞれの意味を説明し、それを解決するためには例えばこんな方法があるねと指導する時間が必要になる。

事務局

小学校の保健は3年生からあるが、体力には一切触れてない。中1から敏捷性とはこういう力だよとか、こういうのを高めるとこういういいことがあるよとか、そういう場면을小中一貫で取り入れていくと、それは非常に大きな特色になる。それを子供たちに還元させてどうこうというのはまたその次の問題。

アドバイザー

例えば先生がやった1時間の指導案のようなものがあると、それは先生にとっても役に立つ。

委員

昔の資料なら遊びとリンクさせたものがある。

事務局

シールをはらせていくとか、それに近い取り組みもこの中にいくつかある。

アドバイザー

第一学習社のもいいがもっと簡単に、3年生から中学3年生まで自分の身長、体重を含めたレーダーチャートがずっと残っていくようにはできないか。数字入れてパソコン使うと簡単。かつて都教委で作ったが、宣伝が足りないからほとんど利用されなかった。

委員

学校単位で蓄積している時は残るが、区では第一学習社に送った個人のデータは残してデータベースに積んでいるのか？

事務局

その年度の数値は一覧で残っている。データベース化するところまではいっていない。

委員

学校も紙ベースしか残ってない。だから伸びなどの変容が見づらい。あれがデータで残っていればパソコンに開いて。逆に言えばそれが小中一貫でできればすごい。

委員

小中一貫でやるのならやはり1年生から9年生までのデータをちゃんと残し、自分が必要な時に見てここが弱いと振り返れないと駄目。

アドバイザー

1、2年生は悉皆でやる必要はない。ただその学校が必要だと思えば、そういうものがあれば数字を入力するだけだから1年生でも蓄積できる。そういうプログラムやソフトを提供する。

委員

スポーツテストの記録を入力し、それがプリントアウトされて出てくるソフトが昔あった。でもあれはその1回だけ。一貫でやるのなら個人情報にも配慮して9年間蓄積できるとよい。

委員

活用を小中一貫でやるのであれば、第Ⅲ期で自己分析できるような指導を、その前のどの段階で、どんな形でやるか。もし例示として出すのであったらその程度ではないか。そして第Ⅲ期では自分たちで活用してやっていきますよとできれば。

事務局

中学に入ると体育理論という形でそういったものが位置付けられているので、保健体育で取り扱うが、小学校ではそれがないので、先ほど委員先生がされたような指導場面をどこかで提示できるかというのかなと。これは(1)に入ります。

委員

小学校では先ほど委員先生が言ったような形でもいいかもしれないが、中学ではそれはない。鬼ごっことか。

委員

常に遊びとリンクさせたぐらいしかない。

委員

中学ではまずそれはない。中学はもう客観的に自分の体を見なければいけないので。

委員

要するにこの体力テストを見て自分を分析し、何かに取り組もうという学び方の姿勢を作りたい。それを持たせたいので第Ⅲ期では、それを見て自分の生活や運動を振り返って計画を立てられるようにするのがベストで、その前段階の指導があるといい。それがどの段階のどの程度のものなのかが難しいですが、ただ遊び程度ならば僕も資料を持っている。

委員

ただ子供は5年生にしても6年生にしても、自分の体力が数値化されて出てくるのにはすごく興味が湧く。「これに関してはすごくいい点数とっちゃった。できちゃうのかな」みたいな、子供はすごくそういうところがある。特に数値化されるとものすごい興味を示す。5、6年生になると特にそうなのでその何かできないか。

部長

もう一つは、中学生ぐらいになってくると部活をやっている関係で、その運動にいかされる特殊な体力が上がる。例えばバスケットをやっていたら垂直飛びがほかより強くなるとか、敏捷性が上がるとか、顕著に出てくる。そういう意味ではⅢ期の子供たちがそういう分析をしつ

かりし、足りない部分を補うにはどうすればいいかを勉強する、勉強の仕方をいま先生が言ったように第Ⅱ期のところでしっかりと根付かせていくことは必要かもしれない。

事務局

その他（3）は部活動。今回、教師の指導資料と子供たちが活用するワークシートと考えると、部活動で何か資料を示すのはなかなか難しい。示すとしたら部活動を小学校6年から行う際にこういった配慮をしているとか、ねらいとして運動もそうだが規範意識も視野に入れているとか、何か体制としてこのように取り組んでいるということを紹介する。

委員

桜小中でやっているのがある。今度、保護者会を開くので、その時の資料をお持ちして先生方に見ていただき、それを一般化していけばいい。

事務局

保護者会資料や実施要項などがあればありがたい。

委員

例として示してもらえらるなら、それは桜小中がいきることになるので、今度持ってくる。

委員

ワークシートじゃないですね。

委員

ワークシートじゃなくて実践例。

委員

実践の取り組みはこんなふうに取り組んでいますと入れる。

事務局

そのぐらいで止めておかないと、それこそ一般化が難しくなる。

委員

ただ部活動にはこんな課題もあり、これをクリアにしていかないと駄目という部分もある。

委員

次回までの課題について。

事務局

今日の協議を精査して示し、次回役割や具体的な内容などを詰める。それでは本日の第2回体力向上部会を閉会する。

- 次回 6月 25 日(火)15:30～本庁舎 1102 会議室
- 次々回 6月 29 日(火)15:30～東庁舎 401 会議室